

花川病院

症 例 概 要 患者氏名：T.T様（90代 女性） 病名：脳梗塞後遺症 誤嚥性肺炎

入院期間：平成29年8月下旬 ～ 平成30年3月上旬

経過：サ高住にご夫婦で入所していたが、脳梗塞後遺症で誤嚥性肺炎を繰り返し、療養病棟入院した。当初はターミナルと考えられたが、本人は経管栄養、延命治療を望んでいないことから、経口摂取に取り組み、完全側臥位で経口摂取可能となった。経口摂取と共に、笑顔、会話もふえ、今後は夫と共に入所可能なナーシングホームへ退院となった。一度は諦めたご家族からは感謝のメールを頂いた。

内 容

数年前よりご夫婦でサ高住に入所していた。入居時は歩行可能で夫の世話をしていたがH28年脳梗塞後から全介助状態となった。平成29年8月上旬、意識レベル低下、肺炎でH病院入院。その後施設に戻ったが、病状管理目的で当院療養病棟へ入院となった。入院時は食事非摂取の影響で痩、筋力低下が目立ったが、本人は以前から経管栄養、延命治療は望まないと話していたことから可能な限りの摂食と補液対応となった。長男、長女は東京、横浜在住で、もしもの時は葬儀屋対応となった。入院時から医師、看護師、介護士、PT、ST、管理栄養士等とチームで取り組んだ。当初は経口摂取すると痰量が増加し肺炎の併発も見られ、ギャジジ60度10分程度で血圧の低下、意識レベル低下の状態でお楽しみ程度の摂食も進まなかった。10月になって全身状態安定し摂食開始。ベッドをフラットとし左右どちらかの完全側臥位で2～3口摂取後にトロミ冷水との交互嚥下、摂取後は30度のファラータ位経過との摂食条件での食事介助とし11月から2食確立した。最初は会話も単文レベルであったが、食事摂取ができるようになると発語がふえ笑顔も多く見られるようになった。今後は夫と一緒に住ませてあげたいという家族の意向と完全側臥位介助が可能なナーシングホームへの入居となり平成30年3月上旬に退院となった。Tさんをご家族が東京ということもあり、ファミリーファーストのメール対象者であった。ご家族へTさんの食事摂取状況や表情、Tさんのご家族へのメッセージなど、随時お伝えした。退院時ご家族から感謝のメールをいただいた。「お世話になりありがとうございます。本当に諦めていた母に、ちゃんと心を繋げていただけて会話がつながり会いに行くのが楽しみになりました。皆さまの優しい心の触れ合いが母の心を目覚めさせてくださったと夫と話しています。去年のように、お花見を父と一緒に行けるような気がしています。皆さまに感謝しています。」

FIM 入院時 運動9/91 認知13/35 計21/126

退院時 運動13/91 認知15/35 計28/126